企画展

日清・日露の戦争と福井

●主　催　福井市立郷土歴史博物館
●会　場　１階　松平家史料展示室
●会　期　令和６年12月13日（金）～
令和７年２月24日（月・休）

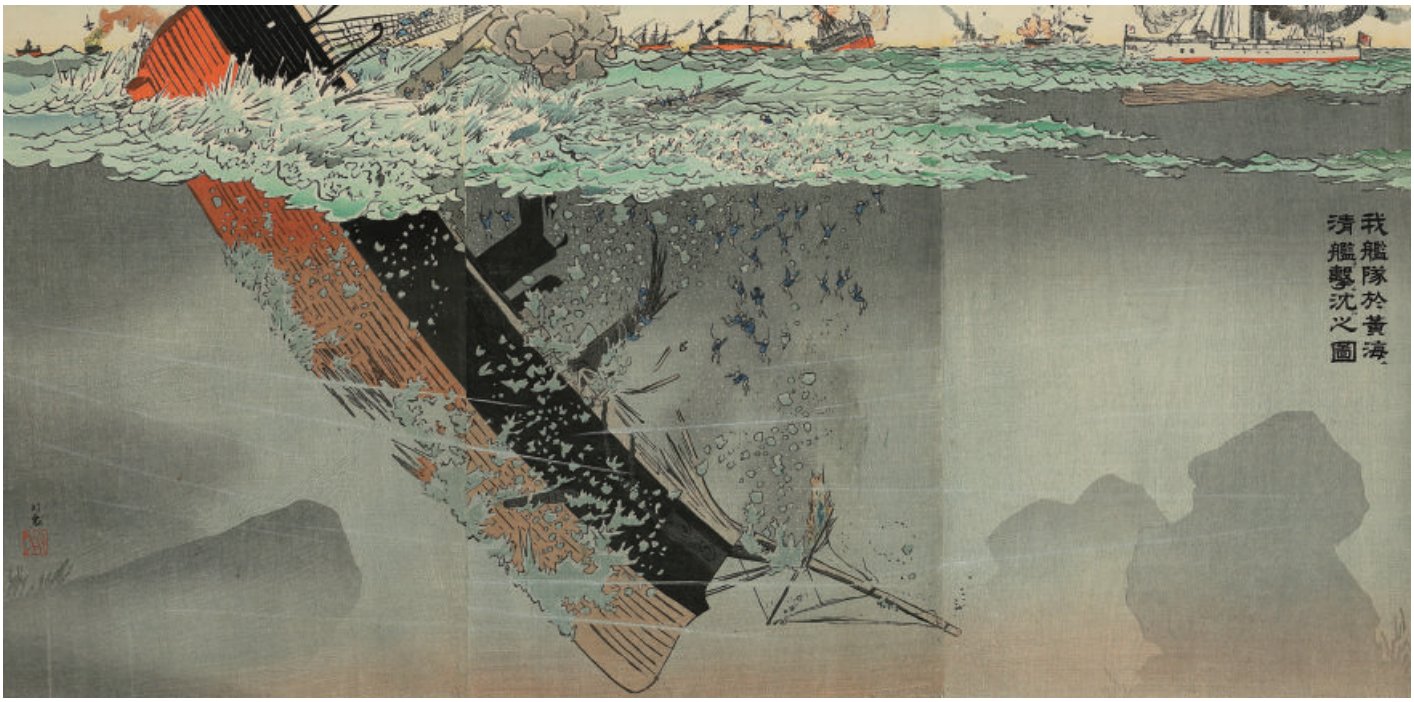
日本が天皇を中心とする中央集権的な体制を敷き、国際社会に参入していった明治時代（1868～1912）。近代国家としては後発の立場にあった日本が国際的な列強国として認知される大きな契機となったのが、日清戦争（1894～95）と日露戦争（1904～05）である。

日清戦争では約24万人、日露戦争では約108万人におよぶ軍人が動員され、前線での戦闘や後方勤務にあたった。また、戦闘で必要となる弾薬や物資を輸送するため、多くの民間人が軍夫として雇用されて戦地に赴いた。そして、戦地の様子は新聞報道や戦争画、軍事郵便などを通じて内地に伝えられ、軍人への慰問や戦病死者への弔祭といった援護事業が全国各地で展開された。両戦争は、日本で生活するあらゆる人々が関わる「国民の戦争」だったといえよう。

明治22年（1889）に発足した福井市からは、日清戦争に364人、日露戦争に1,192人の陸軍軍人が出征した。また、岡田啓介（のち総理大臣）や加藤寛治（のち軍令部長）といった福井市出身の海軍将校たちも出征し、日本海海戦（1905）などの主要な海戦に参加している。本展では、日清・日露の戦争の展開が福井に与えた影響や、福井の人々の関わりを当時の資料から紹介していく。

第１章　戦争を描く

戦争が始まると、新聞紙各社は多くの従軍記者を派遣し、戦地の生々しい様子を記事として掲載した。しかし、日刊紙の本紙上に写真を印刷することができるようになったのは日露戦争中の明治37年（1904）９月からだったこともあり、戦争の視覚的なイメージの形成は派遣された版画の画工たちが手掛けた戦争画によって担われた。これらの戦争画では、日本軍の勇猛果敢さを強調する姿や、敵味方を分け隔てなく救護する姿などが描かれ、日本軍は「文明」を体現する存在として表象された。読者たる民衆にはこのような描かれ方が「事実」として受け止められ、戦争への支持や大陸進出を求める世論のさらなる高揚につながっていった。



小林清親画「我艦隊於黄海ニ清艦ヲ撃チ沈ル之図」（明治27年、当館蔵）

第２章　戦時を生きる

日清戦争（1894 ～ 95）は明治憲法体制下における初めての対外戦争、また日露戦争（1904 ～ 05）は世界史上における総力戦の端緒といえる戦争であり、福井から出征した軍人や福井に住む人々に様々な影響を与えた。

日清戦争では、明治22年（1889）に開庁した福井市役所が兵士の召集、献金・寄贈品の斡旋など多種多様にわたる兵事事務を担っており、戦地と内地を繋ぐ体制が整えられていた。戦争が始まると、新聞社が連日のように戦況の推移を報じて戦争への関心を大いに高めたこともあり、軍資献金や物品献納、軍人家族救恤（きゅうじゅつ）が盛んに行われた。しかし、10年後の日露戦争では次第に膨大な人的被害が明るみになり、内地の市民感情は強く動揺した。特に明治37年8月19日から旅順攻囲戦が始まると、福井でも負傷兵の後送や戦死者の公表が連日のように続き、福井の人々は近代戦の悲惨な現実を目の当たりにすることになる。戦死した軍人の遺族や傷痍軍人への支援が必要となる中、積極的に応じたのが日清戦争直後の明治28年に東京から福井へ拠点を移していた越前松平家だった。同家は旧藩領の出身者を主な対象に、遺族への弔慰や傷痍軍人への見舞、凱旋軍隊への寄贈などで約15,663円にも上る資金を拠出した。また、18代当主・侯爵松平康荘（やすたか）夫人の節子（ときこ）は日本赤十字社の篤志看護婦となり、傷痍軍人の慰問や凱旋軍隊の歓迎など積極的な活動を行った。

明治38年9月5日、ポーツマス条約が結ばれ、日露両国は講和するに至る。しかし、賠償金のない講和条件に対する民衆の不満は大きく、福井や小浜では講和に反対する大会が開かれ、政府への強い批判が展開された。

第３章　戦争を記憶する

戦争の終結後、日清戦争は「明治二十七八年戦役」、日露戦争は「明治三十七八年戦役」と呼称され、清とロシアに対する「戦勝」が繰り返し強調された。福井停車場前には「祝凱旋」「陸軍万歳」「海軍万歳」と掲げた凱旋門が建設されるなど、戦勝を祝う大規模な祝賀行事は全国各地で行われた。しかし、両戦争により膨大な戦死者（日清：約13,800人、日露：約85,000人）が出たことは明白であり、それ以上の数に上る傷病者（日清：約3,900人、日露：約153,500人）の社会復帰を促す必要もあった。民衆の国家と軍隊に対する敬意を繋ぎ止めるため、政府・軍・地域社会はさまざまな形で戦争を記憶化していくことになる（原田敬一『日清・日露戦争』）。

明治39年（1906）4月30日、東京の青山練兵場で陸軍凱旋観兵式が開催された。この時、皇居外苑では鹵獲（ろかく）した旅順要塞の要塞火砲など兵器計85,521点を陳列し、旅順要塞戦の意義を来場者に強く印象付けた。観兵式の後、4月30日は大正6年（1917）12月から靖国神社の春季例大祭と定められ、日露戦争の勝利祝賀と戦死者の祭祀は結び付くようになる。福井市では、明治39年9月24日に西南戦争・日清戦争・日露戦争の戦病死者が市祭として足羽（あすわ）山招魂社に合祀された。また、鯖江の歩兵第36連隊では営内で招魂祭を開催するにあたり、自治体を通じて在郷軍人に参加の希望を問い合わせている。招魂祭は、軍と地域が戦争の記憶を共有する場として日露戦後の社会に深く根付いていった。

二十八サンチ砲を発射する第十師団の砲兵 ※AIによる着色加工
「三十七八年記念写真帖」（当館蔵）

福井停車場前に設置された凱旋門 ※AIによる着色加工
「郷土史関係写真帖」（当館蔵）

コラム

日露戦争の記憶と福井県―陸軍記念日を事例に―

福井工業高等専門学校　一般科目教室（社会）
助教　木村美幸

1905年に終結した日露戦争は、その後の日本で長く記憶され、顕彰されていくことになった。その代表的なものが、陸軍記念日・海軍記念日である。この記念日はそれぞれ日露戦争中の大規模な戦闘があった日に設定され、陸軍記念日は奉天会戦の終結した3月10日、海軍記念日は日本海海戦のあった5月27日である。これらの日は日露戦争を記念する日として、当初は陸海軍内において行事を行う日としてはじめられ、1930年前後を境として、都市や農村でも広く陸海軍に関する行事を行う日となったことが知られている[1]。

福井県内においても、この陸海軍記念日の行事が行なわれた。海軍記念日行事については、福井県内で本格的に実施されていくのは、1935年以降と比較的遅く、講演会や海洋少年団の団員による市内行進などが行われていた[2]。一方で陸軍記念日は、比較的大規模な行事が大正期から行なわれていた。福井県内における陸軍記念日行事で最も古くから行われていたのは、敦賀連隊での模擬戦である[3]。陸軍記念日に合わせて実戦形式の訓練を行う様子が報道され、注目されていた。

こうした模擬戦は1928年頃から福井市内やその周辺地域でも行われるようになった。この模擬戦には現役の軍人のみではなく、在郷軍人や青年団なども参加し、地域を巻き込んで開催された。規模は年ごとに違うが、大規模な年だと福井市周辺のみではなく鯖江や武生まで軍隊が展開するような模擬戦が行われた。

このような陸軍記念日行事に大きな影響を与えたのが1928年に開店しただるま屋百貨店（現在の西武福井店）である。だるま屋は尋常小学校・高等小学校の教員を務めた後、県の教育課職員を務めた経歴を持つ坪川信一が店長を務め、従業員の多くが教員出身である異色の百貨店として知られている。だるま屋は特に「教育の商業化」「教育の生活化」を経営理念に掲げたと言われる[4]が、陸軍記念日行事にも関与していた。

坪川信一（1887～1962）
「だるま屋少女歌劇 ブロマイドと写真」
（福井県文書館蔵）

特に1930年（日露戦争25周年）の陸軍記念日に合わせて、戦車の展示を含む陸軍展を開催し、だるま屋で日露戦争の犠牲者に対する仏式の追悼法要を行ったことは特筆される。陸軍展は3月8日から27日にかけて行われ、「第一会場二階ホールにて戦士の遺品・パノラマ、第二会場四階屋上にて山砲・機関銃、第三会場隣接バラックにて昼夜二回余興・講演など」が行われた[5]。屋上では毎日大砲や機関銃の空射が実施された[6]。追悼法要については、陸軍記念日後の3月12日に陸軍展の会場に日露戦争の遺族や陸軍関係者、福井県知事を招待して行なわれた。日露戦争当時、だるま屋社長の坪川信一は18歳で、日露戦争に出征する軍人を見送った「無名の一青年」だったが、坪川はその様子がそれ以降も忘れられなかったという。だるま屋において追悼法要を開くことを坪川が決意したのは、①日露戦争の戦死者の家族がいるにもかかわらず戦争に行き亡くなった、日露戦争戦死者の「苦闘のお姿」への感謝を考えたこと、②日露戦争から25年経っても生きながらえていることに対するおわびの心の2つからであるとする。この追悼法要におけるだるま屋店長の坪川信一の追悼文は評判を呼び、「遺族席から嗚咽の声」がもれたのはもちろん、「頑固一徹の硬連隊長」であった今井信夫大佐（当時鯖江歩兵第36連隊長）が涙を流したと評された[7]。坪川はその後も、軍隊に協力して慰問品の提供や「国防思想普及」を目的とした展覧会などを行うが、その背景にはこういった日露戦争時の原体験があったのだろう。

その後もだるま屋は陸軍記念日で中心的な役割を担い、翌年以降模擬戦が終わった後の講評はだるま屋前で実施された。福井駅前の一等地に軍人が勢ぞろいしている様子は毎年写真付きで報じられた。しかし、この追悼法要の翌年、

満州事変が発生し、日本は戦争の時代へと入っていく。陸軍記念日行事も「十日陸軍記念日／英霊に黙祷し墓地を清掃して招魂祭を行ふ[8]」「英霊に黙祷を捧ぐ／きのふ戦時下の陸軍記念日[9]」「決戦一色の陸軍記念日／敵必滅の誓ひ新た／挺身殉国の熱祷捧ぐ[10]」などと、報じられるようになっていった。陸軍記念日は単なる日露戦争を回顧する場ではなく、日中戦争やアジア・太平洋戦争との繋がりを強く感じるものへと変わっていった。市街戦は日中戦争期にはそれまでにも増して大規模に行われるようになったが、アジア・太平洋戦争がはじまると戦局の悪化に伴って縮小していった。坪川が日露戦争でみた、帰って来ることができない兵士を見送る家族が再び出てくる時代に、だるま屋は軍隊の祝祭の中心地であったのである。

註 (1) 原田敬一「慰霊と追悼」（倉沢愛子ほか編『岩波講座アジア・太平洋戦争２　戦争の政治学』岩波書店、2005年）。

(2) 「想ひ起せよ！けふ海軍記念日」『福井新聞』1937年5月27日付朝刊3面、「あす海軍記念日！五百の海国健児が市中行進」『福井新聞』1942年5月27日付夕刊2面。

(3) 「名残の陸軍記念日」『大阪朝日新聞』1919年3月12日付3面北陸版など。

(4) 『福井県史通史編６』（福井県、1996年）204頁。

(5) 「だるま屋百貨店年次記録」「西川秀男文書」福井県文書館所蔵。西川秀男は、1928年生まれで、1945年にだるま屋に入社し、人事部長などを務めた。

(6) 「鯖江聯隊の勇士らの壮烈な奮戦のあとを偲ばす日露戦役廿五周年記念陸軍展／愈よあすから開場」『大阪朝日新聞』1930年3月7日付朝刊9面福井版。

(7) 藤田村雨『だるま屋百貨店主坪川信一の偉業』（丁酉社、1938年）。

(8) 『福井新聞』1938年3月10日付夕刊2面。

(9) 『福井新聞』1940年3月11日付朝刊3面。

(10) 『福井新聞』1944年3月11日付朝刊3面。

軍艦の艦橋を模した だるま屋百貨店「昭和8年大演習写真」（当館蔵）

海軍記念日ポスター（個人蔵・当館寄託）

同時開催の展示（２階 企画展示室）

冬季特別陳列　天然痘に挑んだ男　笠原良策

令和7年1月24日（金）～3月16日（日）

次回の展示（1階 松平家史料展示室）

企画展　松平家の世界～徳川の世に繋栄した大族～

令和7年3月1日（土）～4月20日（日）

展示解説シート No.174
令和6年12月13日発行
福井市立郷土歴史博物館
〒910-0004 福井市宝永３丁目12-1
電話 (0776) 21－0489 FAX (0776) 21－1489
担当 山田 裕輝
印刷 ㈱宮本印刷